虚子記念文学館投句特選句・令和二年十一月

稲畑汀子　選

虚子館に来れば友あり冬ぬくし　新潟　安原　葉

燦々と冬芽に日差し降りそそぐ　兵庫　奥田好子

泥ついてから大胆に泥鰌掘る　兵庫　辻　桂湖

この町の日ざしでありぬ七五三　神奈川　進藤剛至

初鴨やこの川にこの水に慣れ　京都　山﨑貴子

落葉して空の高さの戻りくる　鳥取　前田　千

今年酒徳利の小さき蕎麦屋かな　兵庫　キートスばんじょうし

水鳥の哀しみ湛へ湖碧く　神奈川　平野孤舟

始まりしばかりの未来七五三　兵庫　寺杣啓子

すくつては放り上げたる散紅葉　兵庫　武田奈々

（青少年）

入選句・令和二年十一月

やや寒や六甲に日溜りありながら　兵庫　田村惠津子
美しく晴れ渡る空神の旅　奈良　好川忠延
富士望む丘の茶の花日和かな　兵庫　小杉伸一路
茶の花やこつこつ風雅学びけり　兵庫　岩水ひとみ
犬連れて散歩小春の芦屋川　大阪　鶴岡言成
日照雨引きつつ柊の花こぼる　京都　前　悦子
冬晴や蔵また蔵の法隆寺　香川　清水茂昭
青写真あの日の僕を写さうか　兵庫　中村恵美
そのへんに色づくものや冬立てり　兵庫　岸川佐江
一生の師を得る幸や嵐雪忌　徳島　奥村　里
水音も落葉も光る庭日和　石川　辰巳葉流
橡落葉よけて飛び石ふみにけり　大阪　辻田あづき
しばらくは花柊の香の芦屋　兵庫　玉手のり子
末枯の径行き深めゆく思索　兵庫　永沢達明
柊の花の香りに籠り居り　兵庫　高橋純子
寄り道は親子の好きな落葉径　兵庫　深尾真理子
其角には酒嵐雪忌には菊を　大阪　西尾浩子
稿の手を止めて一枚著る夜寒　兵庫　池田雅かず
カフェオレに薄き膜あり冬立つ日　滋賀　大久保　樹
散るものに色づくものに冬来る　大阪　林　曜子
覗き込む不思議の世界青写真　兵庫　涌羅由美
神の留守されど詣でる人のあり　大阪　綿谷千世子
茶の花やむかし庄屋の庭に咲く　兵庫　山岸正子
喧騒を包みて静か冬霞　兵庫　山口弘子
動くもの封じて立ちぬ冬霞　兵庫　金田八江子
天までを黄金に染めて蜜柑山　兵庫　大西美知子
首里城の再建約す石蕗の花　兵庫　伊藤秀子
冬がすみ湖面は底に沈みをり　兵庫　入谷千惠子

福知山城壁光る初氷　兵庫　不乱鬼
芦屋川土手に松あり茸生ふ　兵庫　小川孝子
冬めくや川吹き抜ける山の風　兵庫　長安悦子
虚子館の人の小春へ会ひたくて　京都　杉森大介
小春日や一目会ひたく上京し　兵庫　千家彩音
掃き寄せてまだ焚かずある落葉かな　大阪　大川隆夫
句心の弾んでをりぬ館小春　兵庫　深野まり子
木洩日の明暗石蕗の花の庭　兵庫　池田文子
しみじみと記念樹仰ぐ日向ぼこ　大阪　河辺さち子
邸の門全開にして石蕗日和　兵庫　松田恭子
掃くよりも拾ふが速し朴落葉　大阪　須知香代子
傘持たぬ悔いや湖北の初時雨　滋賀　石川多歌司
老舗消ゆ紅葉且散る頃のこと　兵庫　西村みどり
諧謔も風雅の心一茶の忌　大阪　石橋玲子
枯尾花尽きれば河口光る海　兵庫　田中節夫
一茶忌の雀へ心遊ばせて　兵庫　二瓶美奈子
慈愛てふ言の葉うかむ一茶の忌　兵庫　山本康子
萩紅葉ひととき庭の主役なる　兵庫　福間笙子
散歩する母の笑顔に照紅葉　神奈川　金子三奈乃
馬肥ゆる開け放たれし厩舎かな　大阪　若林友子
山間の淵に等しく時雨かな　兵庫　高市敦之
寒椿抜き差しならぬ構へあり　東京　宮村士々
北風に紋うつりゆく砂丘かな　千葉　玉井令子
毒きのこおどけて見せる庭の隅　埼玉　土井洋子